

紹介 木越隆三著『銭屋五兵衛と北前船の時代』

著者	中野 節子
雑誌名	北陸史学
巻	52
ページ	83-86
発行年	2003-12-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/9588

〔紹介〕

木越隆二著

『錢屋五兵衛と北前船の時代』

中野節子

本書の文章は平易で、読んでいてつい著者の世界に入り込んでゆく。その一方で、本書はあくまで綿密な史実を背景に記述されており、著者の歴史研究者としての姿勢は些かも崩れてはいない。歴史書がマニア以外に読者層を広げることが簡単ではない。本書がその困難を克服していることは、本書が二〇〇二年度泉鏡花記念金沢市民文学賞を受賞したことで証明されている。

「はじめに」の表一「錢屋五兵衛に関する伝記・小説一覽」を見てその多さに驚いた。それらに目を通した著者は、錢屋五兵衛ほど毀誉褒貶の著しい人物はいない、と言う。錢五は同時代の人々からは「藩権力と結んだ政商」と批判された。錢屋疑獄事件があればほどの大事件になったのには、当時の世評が大きく関わっている、と述べる。錢五の評価は明治になると「コペルニクスの転換」を遂げた。転換の背景にあるのは、国粹主義であった。歴史上の事象は、常

に時代を投影して語られる。

木越氏は『金沢市史』近世六（資料編八）で官腰を担当した。私も金沢市史の専門員をしていたので、あの当時北前船を追って、木越氏の班が青森や北海道の調査を重ねていたことはよく覚えている。調査のねらいは的確に当たった。東北地方での加賀藩北前船の活動の一角が鮮明になったのである。数年前、金沢市史における会合での彼らの熱のこもった調査報告は極めて興味深かった。当時の調査の結果は本書の二、三、四章に生かされている。

第一章 官腰

錢屋の家では一七才になると長男に家督を譲るのが伝統であり、本書の主人公三代目錢屋五兵衛も同様に一七八九年に家督を継いだ。江戸時代は早熟である。五兵衛の父親は醤油醸造、質屋、古着屋、そして船商売と多方面に商売を広げていた。五兵衛は呉服商に精を出したが、偶々質商売で担保に取った中古船で商売したことで小錢を稼いだ。海運を伸ばすきっかけは些細な契機であった。

第二章 材木問屋

江戸時代初頭、南部藩の下北半島、津軽藩の津軽半島は、

翌^{あすなろ}檜の美林でおおわれていた。それが、近世前期の乱伐で山は荒れ、災害を起こすようになったのだ。南部藩は伐採制限に踏み切るが、これを留山と言った。しかし、両藩の財政窮乏もあって、一八世紀後半からは再び桧などが用材として切られた。近世は材木の需要が常に高かった。加賀藩でも藩庁の公的需要は衰えを見せず、生活の向上と共に民間の自作による需要も材木景気を支えていた。

五兵衛の当面の課題は始めたばかりの海運業をいかに発展させるかで、周囲から進められた公的な役職である材木問屋職の就任をいやがった。しかし、強制的に引き受けさせられた問屋職を始めると旨味がわかった。材木流通の主導権を握れたのである。五兵衛は材木取引と材木海運に熱中した。そして材木問屋に就任してから本格的な北前船主になった。

第三章 北前船

錢屋の伝統を継いで、錢五も長男喜太郎が一七才になった一八二五年、家督を譲り隠居した。但し隠居は名目であって経営の実権は錢五の手にあつた。隠居を契機に錢五は「年々留」と称する日記を書き始めた。著者にとつて五兵衛を蘇らせる重要な史料となっている。

五兵衛の持船数は天保期以後、ほぼ一五艘を維持した。この錢五船団は蝦夷地と大坂を廻り、北前船通例の交易をする一方、秋田、津軽、南部藩の蔵米の輸送も行っており、多様な海運経営をしていた。

第四章 青森支店

天保期は錢屋の海運の上昇期で、沖船頭や手代が数多く雇われた。その中に木津屋喜助がいた。彼は錢五の青森支店開設の立役者となった。喜助の働きによって五兵衛の買い積み商売は極めて合理的且つ迅速に行われた。彼のように青森で支店業務を行う者を、岡支配人と呼んだ。他の北加賀の船主も同様に岡支配人を持っていた。弘前藩はこれら北陸の有力海商に資金調達を求めてきた。五兵衛は弘前藩へ大名貸しをし、蔵米による返済を受け、南部藩にも資金の融通を行っていた。

喜助の派手な商売は青森町人の反感をかかった。喜助宅は投げ火の難にあつている。錢五の商売に対する風当たりは青森でも強かつたのであつた。

下北半島の付け根、野辺地は小さな落ち着いた町、とある。木越氏らは野辺地の町史編纂室で調査を行った。金沢の研究者の未踏の地だ。町史編纂室では、金沢の研究者が

下北、陸奥湾に調査に来ないのが残念だ、と話された。青森や下北では錢五を知らない人はない位有名だ、あなた方ははるばる調査に来られた最初の人だ、と言われた。歴史は現地に立つて考えないと大切なことを見落とす、この大原則を改めて思い知った、と著者は述べる。

第五章 海の百万石

「海の百万石」とは、舟橋聖一が錢五の活躍を形容したものだそう。

文政年間、加賀藩は二度目の銀札発行に踏み切った。五兵衛は「札尻御用」をつとめたが、それは銀札の信用回復のため、銀札償還の調達金に応ずることだった。その他にも錢五は藩の調達金要求には率先して応じた。調達金の返済は年貢米で行われたが、そのため、錢五の海運業では蔵米の輸送が多くなった。

一八三三年以来穀物の領外移出は禁じられていたのに、五兵衛は密かにその禁止を破ったと噂された。五兵衛と藩年寄の親密な交流も庶民の反感をつのらせた。五兵衛は地元における不人氣の挽回に努め、古米を貧民救済にと提供した。

加賀藩では、銀札に対する不安解消や財政再建のため、

領内の主立った豪商達を協力させる必要があった。多くの商人が藩に対し好意的ではなかった中で、錢五は善意をもつて応えた。そのため年寄衆から注目されるようになった。一八四〇年、当時の藩政の中心であった奥村栄実の屋敷への出入りをついに許された。栄実は豪商の協力を得て藩営海運事業を始めた。藩が錢五の船を買い上げ、船籍は藩の改作所所屬とし、これを錢五が運航し利益を上げる、という方式であった。藩営海運の実質を担った五兵衛はその褒美が取るに足りなくとも、栄実のため、藩のため、御国の財政立て直しのために奉仕することを優先した。

第六章 錢屋疑獄

五兵衛は一八二八年以来、道具類のみでなく、手頃な切高や開墾地を買い集め小作料を収益とした。藩法によれば町人は他村の田畑を購入することも所持することも出来ない。五兵衛は法の網をかくぐって田畑を入手していた。持ち高は八五〇石に近い。これ以降の展開は、知られた史実を中心に語られる。

五兵衛等の河北漏埋め立て・新開工事そのものにも激しい抵抗があった。人足に地元百姓でなく能登の黒鉄集団を動員したからだ。工事の早期完成を図ったものだが、木

谷・島崎両家の新開場所では、地元の村に工事を丸ごと請け負わせ、地元百姓が人足となり給銀を受け取った。銭屋のやり方では地元の仕事が回ってこないと憎まれた。

終章 密貿易説

五兵衛の後半生の活躍で、官腰は繁栄し、それを土台に、官腰の北前船海運は飛躍した。銭五船団の果たした役割は大きかったと言う。

五兵衛の密貿易説をみてゆくと、作り話や後年の附会が大半である。では何故、事件後にこれら密貿易説が出たのか、五兵衛に対する「鎮魂」の気持ちからなのか、と著者は述べている。

本書はこれまでの銭五研究に新たな一石を投じた。歴史上の事象は、常に時代を投影して語られる。木越氏の語りは、将来、どのような時代を投影したと語られるのであるか。

二〇〇一年一月 北國新聞社 一八〇〇円)

(金沢市長土塀二―一―二四―九〇一)